

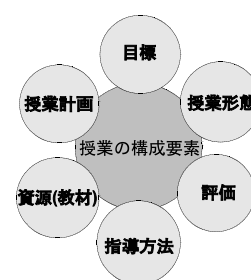
「蛙学への招待」の授業デザイン

1. 授業のねらい

大学生の学ぶ意欲の低下が大きな問題になっています。乖離する高等学校と大学間の学びの質を克服できない学生や、初等中等教育での学習内容の縮減及び学習指導の変化を見る時、この問題は今後さらに深刻になると考えられます。したがって大学の初年次教育には、授業を構成する様々な要素を十分吟味した授業デザインが必要になります。

2. 授業のデザインとその流れ

「蛙学への招待」は、右に示した6つの構成要素を基に二つのカリキュラムでデザインされています。その一つは、現在その生息が危ぶまれている両生類無尾目（カエル）に着目し、その種や分布、形態や生態を学び、文化や食文化を通して地球の環境変化を総合的に捉えることをねらい（顕在的カリキュラム）とするものです。もう一つは、学生の学ぶ意欲の覚醒や learning による問題解決能力の育成、また学びの乖離の克服をねらい（潜在的カリキュラム）とするものです。



授業は、カエルの種の分化と分布から始まり、外部形態や内部形態の観察を経て、古生物の海から陸への進化まで、主に私の teaching によって進められます。しかし、5時間目の「内部形態の観察」から授業は作業学習やグループ学習を通じた学生の learning に移行します。さらにそれを徹底させるために、10時間目以降は5回にわたってカエルをテーマにした授業を学生が行います。彼らを授業の文脈にしっかり位置づけ、活躍の場を与えながら、潜在的カリキュラムを走らせるのです。学生は、授業の目標と計画を練り直し、情報収集、情報処理、内容の組み立て、メタ認知を繰り返しながら約2ヶ月間教材研究に没頭するのです。

例えば、内部形態の授業を行うグループは、教材となるウシガエルのDVD製作を目指し、講義終了後、地下鉄が止まるまで精密な観察や解剖を行っています。その後、秒単位で作ったシナリオを元に、休日返上で画像の編集作業を進めていました。さらにそれを利用して、近隣の小学校で内部形態や解剖実施に関する調査も自主的に行いました。この間、毎回行う交換カードや教材研究での面接を通して学生をしっかりモニタリングし、必要な内容やモチベーションに関する情報を彼らにフィードバックします。学生が行う授業では毎回自己評価と他者評価を行い、その情報も学生にフィードバックします。最終回の授業は、農場での野外実習となり、学生は絶えず授業の前面に引きずり出されていくのです。

3. 授業改善について

授業評価の「得点平均値」は、シラバスの内容や学習指導の修正に利用しています。特に「自由記述」は情報が多く参考になります。しかし、最も有効な情報は通常の授業での学生とのインタラクションやモニタリングの中で得られるものが量質とも圧倒的です。私の授業は、全学教育の中でも最も厳しいと言われています。出席点もなく不可もつける授業にもかかわらず欠席する学生が見られないのは、この授業のデザインを学生がよく理解しているからだと思っています。なお本授業の詳細については、本学「高等教育ジャーナル12号（2004）」に掲載されていますので、そちらもご覧ください。